



ち★ネット!

「顔の見える地域連携」を目指した多職種での情報交換と学びの会
それが、地域医療ネットワークの会です!

令和1年6月13日 第36回 地域医療ネットワークの会

施設における看取り 第2弾

前回に引き続き同じテーマで他施設よりお話しして頂きました。前半はグループホーム、介護老人保健施設、小規模多機能型居宅介護施設よりそれぞれの「看取りの取組みや事例」を紹介して頂き、後半はシンポジウム形式でディスカッションを行いました。病院や診療所、訪問看護ステーション、居宅介護支援事業所、介護保険施設、有料老人ホーム、保険薬局、教育機関等 38施設、103名が参加しました。

座長 地域医療ネットワークの会世話人

渡辺 クリニック
聖マリアンナ医科大学病院

渡邊 寛之
齋藤 祐子

「グループホームの立場から」

グループホーム 百合丘

岩浪 泰介氏

「介護老人保健施設の立場から」

介護老人保健施設 セラトピア

林 芳子氏

「小規模多機能型施設の立場から」

小規模多機能型居宅介護事業所 わくわくの里

飯塚 陵子氏

岩浪氏より、5～9人での少人数での生活で穏やかに過ごすことを目的とし、利用者の尊厳、家族の意思を尊重して対応していることと、医療としては酸素、吸引、麻薬、胃ろうの対応をしていることの紹介がありました。林氏からは看取りケアについて入所時に延命治療や、急変時の対応、状態変化時等細かく確認をとり、看取りケアの同意書をとっていることの紹介と、点滴は血管確保出来なくなったらやらない方針、酸素も苦しい時のみの対応や、医療麻薬は使用しなくても



家族との連絡を細目にとり、その方に常に寄り添うケアの対応をしているということでした。飯塚氏からは日々の変化の戸惑いや心のバランスを保つのが難しい場面がありますが、寄り添いながら現状を受け入れるサポートしていることと、現実に向き合ったときにやはり入院となる場合があり、その都度確認が重要であること。また看取りに対して家族のストレス、スタッフのストレスもあるが、「元気な時から関わっている利用者だから看取ろう」という気持ちで対応していることの発表がありました。シンポジウムでは病院と施設での対応の違いや、最後に食べれなくなるのは本人が旅



立つ準備をしていることであり、耳は聞こえているから話しかけて時間を共有して見送ることの話題も出ました。他には職員が自宅で死を経験していない世代であるため看取りに対して不安もあることが話題になり、それに対しては職員研修や現場の中で学んでいくことと、最期の過ごし方をどうするかはその人それぞれであり、その都度確認していくことが大切であることを共有し、学びになったと思いました。